

上杉家の能面--野上ノートの紹介を中心に

著者	西野 春雄
雑誌名	能楽研究 : 能楽研究所紀要
巻	25
ページ	224-194
発行年	2001-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020556

上杉家の能面

——野上ノートの紹介を中心に——

西 野 春 雄

1 維新の混乱と欧州での能面珍重

明治維新以前、能楽を愛好した大名の家々には、おびただしい能面・能装束が所蔵されていた。それらの一端は、たとえば、池内信嘉著『能楽盛衰記』下巻・東京の能(大正15年5月、能楽会)の「第十七 能具」の章(能面・能装束)からもうかがわれる。池内信嘉の故郷伊予松山の東雲神社所蔵となった旧藩主久松侯爵家の能面群、優品揃いの前田侯爵家、細川侯爵家、旧岡山藩主池田侯爵家、大正12年の震災で烏有に帰した藤堂・伊井両伯爵家などをはじめ、「ないやうであるのが大名華族の所蔵品」(同書)といわれる旧大名・華族所蔵の能具の概要が知られ、明治維新後から大正震災にかけての、下賜・譲渡、売り立て、流出、焼失、あるいは維持・保存など、流転・移動の実態が知られる。

これらのコレクションは、能面についていえば、少数の例外を別にして、総じて品質が落ち、優れた面は多くなかったようである。その間の消息は、野上豊一郎著『能面論考』(小山書店、1944年7月)「忘れられぬ傑作能面」から知られる。「多少の例外はあつても、品質が押しなべてガタ落ちで、多くは江戸時代に入つてのウツシであり、ウツシのまたウツシなどもあつて、鎌倉・室町期の古作を見た目にはなさけなくなるやうな物ばかりである。(略)なぜ大名物にはそんなに凡作が多いかといへば、その理由は簡単である。秀吉が天下を取つて朝鮮征伐を始めてから能に凝り出し、古面のよいものをあつめようとしてかなり苦心したけれども思ふやうに集まらなかつたといふ逸話が遺つてゐる。太閤の勢力を以てしてさへさうであつたほどのものが、況んや徳川に取り立てられた大名小名が江戸時代に入つて古面のよいものを集めようとしても集まる筈はなかつたにきまつてゐる。將軍家の所蔵面とてもさうであつた」とある。

しかも「旧諸大名は明治以来争つて売り払つたので、比較的よいものはまとまつ

て好事家の手に収まり、わるいものは骨董屋の店先にぶらさがつてゐるといふ状態も一頃はあつた」(同書)という。かくして、大名家の秘庫から能の家や財閥・実業家など民間に流れたものもあれば、海を渡ったもの、震災で烏有に帰したもの、あるいは幸運にも罹災を免れたものなど、実にさまざまな運命をたどっている。

そうした混乱や海外流出の一面は当時の新聞報道からも知ることができる。次にそのいくつかを紹介しよう。すべて倉田喜弘編著『明治の能楽(一)(二)』(1994年3月, 1995年3月, 日本芸術文化振興会発行, 国立能楽堂調査養成課編集)による。まず、明治11年(1879)5月17日付け『大坂日報』の記事をあげる。

廢物同様になりし能の衣裳や面など何によらず能に用る品を、此頃、商人が在^{ざい}の旧家等へ買に行くはどうする積りか、一切分らず。

徳川幕府の崩壊とともに武家式楽の能楽も衰微した結果、能道具は廢物同様に扱われ、売り払われ、商人が買い漁っていた様子が知られる。むろん海外にも売られた。それは、海外への流出の状況を伝える明治18年(1885)9月19日『東京日日』夕刊の記事からもうかがわれる。

(前略)欧州にてはまた日本風の流行の日々弥増して、倫敦にても巴里にても日本芝居を興行して大入を得たるよりの思付にや、幕府の頃に製作したる能の面や能の装束は極て結構なる品なりとて之を買集むる為に、仏国人某は処々に注文を出し、既に面の数は二百余、装束の数は三百余をも横浜および東京にて買入れたり。其中にも、名作の面には数百円を払へりと云へり。此噂を聞きて、其の営業者は東西に奔走して買集め最中なり。之を齎し帰りて何れ劇場の用にも成すべきならんが、束髪髻に静の面をかけ、中形小袖の上に繻衫の袷衣をなして是が日本の女粧なりなど云ふなるべし。但し、去る不倫の粧は今日東京にて間々其類を見るものなれば、異しむに足らざるべき歟。

欧州におけるジャポニスムの流行と、能面への関心の高まりと海外への流出の一端が知られる。次に示すのも海外での流行と価格の高騰を伝える明治19年(1886)7月2日の『東京日日』の報道である。

一時、ボロ三貫目と廢り果たる能装束・能面は、七八年このかた稍世に芽を出せしが、近來に至りて其価大に騰貴し、名有る面打の打たる面、又よろしき装束等は莫大の価になれりと云ふ。其故は、二三年前より英国又仏国などにて、例のマスキト、ボールの種類に此面を被りて躍る踊りが流行し、夫より面・装

東とも尚古家の愛翫物の一となりて頻に我国より輸入すれば、元方も追々直^ねが上がりて、此程仏京にて売れたる面は千五百^{ドル}弗の価なりしとぞ。又、英京の某豪商は面数四百八十余種を秘蔵すると云ふ。是も例の東洋美術か。

英京すなわちロンドンや、仏京すなわちパリにおける能面・能装束への関心の高まりと能面の価格の騰貴を伝える記事である。

次は明治23年(1890)11月12日の『読売新聞』の報道で、「能面、大に世に出でんとす」の見出しを付けている。

能の面は近頃其の価を減ぜんとしたるが、欧州に於ては頻りに之を珍重し、五百羅漢を五万円に買はんと云ひし程なれば、能面の名作ものは大に其の価格を回復し漸次海外に飛行する傾きなれば、九鬼、榎本の諸氏は頻りに之を買入れられ、以て其の名作物を奪れざらん事^{つとめお}を勉居らるゝ由なるが、徒らに之^{いたず}を蔵^{おさ}むる時は殆んど無用の長物たるに過ず。依て府下三四の有志者は沢山此の能面を集めて一^{たいか}の大廈を築き、壁又は天井に其面を掛けて諸人の縦覧に供し、古物買入れのため時々我国へ来遊する欧州人、就中^{なかんづく}独逸、伊太利の人々に一覽せしめんと計画し居れりと云ふ。

能面が欧州で珍重され、それに応じて価格も高騰し、盛んに海を渡る世情を伝えるとともに、優れた能面の海外流出を防ぐべく対抗策として買入れに腐心する美術行政家九鬼隆一男爵(古社寺保存会会長、皇室博物館総長などを歴任)や、明治政府の文部・外務大臣等を歴任した榎本武揚子爵らの動きを伝えているが、こうした海外に流出した能面については、西野春雄「海を渡った能楽面」(『能楽研究』第22号、1998年3月、法政大学能楽研究所)を参照していただければ幸いである。

また散逸や流出防止策の一例としては、維新以後の混乱期に、金春家の能面・能装束が散逸することを防ぐため奈良の素封家たちが財団法人「諦楽舎」を組織し、拠金して金春家の能道具を奈良皇室博物館にて保管、金春流の流統の維持を図ったことがあげられる。しかし「諦楽舎」のものも戦後に売却され、一部が奈良皇室博物館に収納され、現在、東京国立博物館彫刻室の所管となっている。

ともかく、大名家の能面は、維新以降、売り払われ市中に出たり海外に流出したりして、散逸した家々が多いが、その中であって、これから述べる旧米沢藩主上杉伯爵家のものは散逸せずにより守り伝えられてきたばかりか、古面のみで新面が無く、逸品揃いであった。上杉家の能道具については池内信嘉著『能楽盛衰記』下巻の第十七能具の章では言及されていないが、後述するように、質・量ともに優秀なコレ

クションであったことが知られる。しかし、第二次世界大戦前後の混乱期に、東京へ送られ、一部が東京国立博物館彫刻室の所管となったものの、その大部分は散逸してしまっただけでなく、残念ながら現在、所在不明のままである。

本稿では、質量ともに優れていた米沢上杉家所蔵の能面(および能装束)について、その概要と、戦後に東京国立博物館彫刻室所管となった能面(および能装束)の内容と特色について述べることにしたい。

2 上杉家旧蔵面のあらまし

東京国立博物館『収蔵品目録 美術(絵画 書跡 彫刻 建築)』(1952年12月、編集発行東京国立博物館)の「彫刻」のうち「仮面(能面)」の部に、同館が所蔵する能面のリストが載っている。各面について「名称・数量・摘要(作者・材質・寸法・銘記・特質・伝来など)・年代・世紀・台帳番号」を記していて、数えてみると215面あり、この中に戦後に収納されたものとして、諦楽舎旧蔵品47面とともに、上杉家旧蔵品32面が載っている。

かつて東京国立博物館に勤務され、現在、武蔵野美術大学教授の田邊三郎助氏のご教示によると、上杉家の能面は1947年(昭和22)5月1日付で東京国立博物館に収納された由である。32面の内訳は、伝承も含むものの、室町時代(15世紀5面、16世紀1面)6面、江戸時代(17世紀)26面で、室町時代の6面が注目され、特に15世紀の5面は価値が高く、それぞれ能面形成史の上で興味深い面である。

また、1970年3月に刊行された『東京国立博物館図録 仮面篇』は、同館彫刻室所管の仮面総数324面(伎楽面・舞楽面・行道面なども含む)の図録で、モノクロ写真ではあるが、能・狂言面の研究に有益な資料を提供している。序に、

能・狂言面では、まず明治10年に収納された110面がある。その出所は不明であるが、面裏に「大蔵家」とか「観世大夫」などと記したものがあって、その出所を想像させる。戦後に収納されたものに諦楽舎旧蔵品47面、上杉家旧蔵品32面がある。諦楽舎のものは、金春家から明治初年に手放されて諦楽舎に入ったものである。また米沢上杉家のものは旧大名家の能面の収集の一例を示すものとして興味深い。

とあり、この図録でも上杉家旧蔵品32面が確認される。ただし、図録写真で上杉家旧蔵と記しているのは30面で、2面足りないが、列品番号81および82の「神体」も

面裏の銘文やラベル番号から判断して上杉家旧蔵品であることが確実視されるので、この2面を加えて32面となる。

いったいどんな面が所蔵されているか、それらについては後述するが、その前に、この図録のもう一つの特色について触れておきたい。それは、さきの序文に続けて、

本図版目録には、面裏に銘文等を記すものはそれをすべて収録しておいた。

能面などでは後世の極め銘が多く、銘文の伝える作者は伝承にすぎないものが多いが、研究の資料としては重要である。

とあることである。能面研究にとって図録の裏面の写真(すべてではない)は有益で、特に、さまざまな情報を伝えてくれる銘文等を一括し、拡大して掲載しており、非常に役に立つ。ちなみにこれら銘文等は金子良運編『日本の美術 5 No.108 能狂言面』(至文堂、1975年)によれば、およそ次の10種類があり、それらが単独または組み合わされて使われている。以下の論述ともかかわるので、ここで確認しておきたい。すなわち、

- | | |
|-------------------|-----------------|
| ①刀で刻み込まれている刻銘 | ②細く線書きになっている針書銘 |
| ③墨書銘 | ④朱書銘 |
| ⑤黒漆や朱漆で書かれた銘 | ⑥金泥で書いた金泥銘 |
| ⑦印形が彫られてある刻印 | ⑧焼き印が押されている烙印 |
| ⑨符牒のような模様がつけられる印鈐 | ⑩書き判といわれる花押 |

である。

これらの銘は、**a** 作者名、**b** 模作者の名前、**c** その面にまつわる由来・経緯など伝承に関するもの、**d** その面を作った目的または年月、**e** 後人による極め、**f** 面の名称、**g** その面につけられた固有の呼称、**h** 面の持ち主、**i** 祈願などの願意、などの意味と内容を示している。先に述べた上杉家旧蔵面の室町時代(15世紀5面、16世紀1面)6面、江戸時代(17世紀)26面も、これらの銘文等に基づいている。

3 『東岳院様能楽余香』の記事

ところで、米沢上杉家旧蔵32面は、大名家の能面の収集の一例を物語るものとして興味深く、収集者の審美眼の高さが推測されるが、実は、歴代の藩主が能楽を愛好し嗜みも深かった上杉家は、能楽資料の宝庫といってよく、金剛流との結び付きも深かった。能伝書や謡本・型付などの書物から面・装束などの能道具まで多数所

蔵し、能面に限ってもこの数倍約130面が所蔵されていた。

それを示すのが、井形朝良編『東岳院様能楽余香』上・中・下巻(1974年12月、米沢金剛会発行。非売品・限定版)、および『東岳院様能楽余香』付録として1976年9月に発行された『「東岳院関係文書」解説』(竹本幹夫著、米沢金剛会発行。非売品)である。『東岳院様能楽余香』は米沢藩主上杉家に所蔵されている能楽資料を、写真版とその翻字をそえて刊行した労作で、能楽史研究に有益な資料を提供した。書名の「東岳院」は能楽に打ち込んだ第九代米沢藩主上杉重定(1720年〈享保5〉～1798年〈寛政10〉)の院号である。

【能道具目録】

さて、問題の上杉家所蔵能面について教えてくれるのが同書下巻に収載の『能道具目録』一冊で、「于時寛政二年林鐘日」の奥書がある。当時の藩主は重定の養嗣子治憲(鷹山)で藩政改革を推進していたころである。鷹山は養父に対する厚き孝心から、あらゆる犠牲を払い逸品を整えられたと伝えられているが、井形朝良氏のご教示によると、延宝6年(1678)五代藩主上杉綱憲の時代に出目備後作の能面十数面を発注した書付が発見された由で、名品はその時にも集められたことがわかる。

同書は「御面箱千之部・御面箱鶴之部・御面箱万之部・御面箱亀之部」に分かれ、たとえば、第一丁の御面箱千之部の冒頭を示すと、「一 三筒月(三箇月の誤写) 鶴之一宝来作」のごとく、それぞれ面の名称と作者名を記し、千之部33面・鶴之部36面・万之部30面・亀之部27面、合わせて126面を数える。ただし、このなかには、後述する翁面2面の記載がなく、翁面は別格に扱っていたようだ(これは一つの見識を示していると考え、それは猿楽が古くから勤めてきた翁は別に扱うのが望ましいからであり、正しい処置というべきであろう)。なお「千・鶴・万・亀」の四分類が何を基準にするかわからないが、これについては後に述べる。

同書に記載されている作者たちは、伝承によるとはいえ能面の創作期をになった「赤鶴・越智・福来・龍右衛門・夜叉・文蔵・小牛・徳若・千種・増阿弥・氷見・春若・宝来」、創作期に続く室町後期から桃山から江戸初期に活躍した「三光坊・真角・慈雲院・大光坊・井関上総介親信・井関河内・大和」などで、これらから判断しても、上杉家の能面は室町時代から安土桃山時代・江戸時代初期までの作品に限られると言ってよい。江戸中期以降の新面はなく、古面ばかりで、きわめて質の高いコレクションであったものと推察される。

それは、東京国立博物館彫刻室所管となっている32面からもその一端は知られる。たとえば、2001年11月17日から12月15日まで開催された「国立能楽堂二〇〇〇年特別展示江戸時代の能」の図録にカラー写真で掲載されている伝龍右衛門作「神体」(裏に「一トウ」と彫る。一透斎は面作者赤鶴の別銘とされる)のアルカイックな不思議な魅力や、伝福来作「大悪尉」の迫力は息を呑むばかりだ(注)。

注 赤鶴の伝記は検討の余地があり、たとえば、田邊三郎助氏「鐘紡コレクションの能面・大悪尉と大悪尉－赤鶴作傳へのアプローチ」(『國華』第一一七四号、第九九編・第一冊、平成5年9月発行)などが参照される。

【上杉家蔵能面・面箱の写真】

また『東岳院様能楽余香』の263ページ以下に「上杉家蔵能面」として、袋の表に「昭和四年七月納 能面及面箱 三五枚」と墨書された写真(1カット3～4面)が付載されているので、これらの能面の具体的な形状もある程度わかる。ただし、写真3葉が重複していて、面の数は107面(うち2面は翁面)を数える。さきの『能道具目録』の段階では126面(翁面2面を加えると128面)あったから、これらの資料によるならば、寛政2年(1790)から昭和7年(1932)までの間に21面が散逸したことになる。

写真によると、翁面は専用の面箱にあり、別格たることが確認される。能面を収める箱は、むしろ面簞笥と呼んだほうがいい仕様で、左・右、五段に仕切られ、計10抽斗の簞笥が二棹ある。また、すべての能面ではないが面袋に記された面の名称や作者名をたよりに『能道具目録』の記事と照合することも可能であり、この写真は上杉家の能面の全容を調べる上でも有益である。

なお『東岳院様能楽余香』巻末の補稿に「上杉家蔵面箱は、東京博物館に送った儘、終戦の混乱により在所不明となり、写真にて、その面影を偲ぶばかりです」とあり、編集者の井形朝良氏は、同書の執筆当時、上杉家の能面の一部が東京国立博物館彫刻室の所管となっていることをご存じなかったようである。しかし、上杉家の能面の行方を熱心に探索されていた氏は、最近、情報公開が進んだこともあって、インターネットで東京国立博物館に所蔵されていることを知ったという。戦後の混乱で行方不明となっていた上杉家の能面群が、32面ながら、無事であったことをともに慶びたい。

ところで、107面のうち32面については前述の目録や図録で知ることができる。しかし、そのほかの面はいったいどうなったのであろうか。それらも含めて107面

の全容はいかなるものであったろうか。

【忘れられぬ傑作能面】

この問題を考究する際にヒントを与えてくれるのが、前掲、野上豊一郎「忘れられぬ傑作能面」の記事である。ここには86面の傑作能面が記され、観世流宗家本面が圧倒的に多く、ついで、宝生流宗家本面、もと金剛流本面、梅若流宗家本面、京都金剛家、の順に、能の家々に伝えられた本面がほとんどであるが、そのなかで能の家以外のものでは、細川護立侯爵所蔵の般若坊「般若」と、上杉伯爵家所蔵の「神体」の二面があげられているのである。その「神体」について、

「^{しんたい}神體」——^{しゃくづる}赤鶴（上杉伯爵家所蔵）

裏に「一トウ」と彫つてある。一トウは赤鶴（一透斎）の署名の一つである。宝生の本面にも「神體」があり越智^{みち}作と称してゐるが、書上にも『諸家面目録』にも記載はない。（同書157ページ）

とある。

上杉伯爵家所蔵といい、面裏の彫銘「一トウ」といい、これは、さきに伝龍右衛門作として述べた傑作面の「神体」であり、博士は「一トウ」が赤鶴（一透斎）の別銘とされるところから赤鶴作としたものであろう。また、同書「能面の表現意図」の46～47ページには、博士自身が描いた赤鶴と越智の「神体」のスケッチも掲載されている（ちなみに同書のスケッチはすべて博士自身による）。〈写真1〉

この「神体」が龍右衛門作であるか赤鶴作か説が分かれるが、いずれにしろ「忘れられぬ傑作能面」に上杉伯爵家所蔵の「神体」をあげているのであるから、野上博士は1944年以前に上杉家の能面を調査されていることが知られる。したがって野上博士の調査記録が存在したなら、この問題は解決する、しかし、そのような記録があるだろうか。あれこれ思案していたところ、思わぬ幸運が舞い込んだ。

4 野上ノートの発見

2000年3月、野上豊一郎博士のご遺族から能楽研究所に対し豊一郎・弥生子ご夫妻の蔵書の追加寄贈があった。1988年にもかなりの蔵書をご寄贈いただいたのであるが、今回もエジプト研究および能楽研究の洋書12冊を含む興味深い図書資料を頂戴した。その中に野上博士の大学ノート5冊があり、その一冊に、昭和17年8月

4・5日、金春流の桜間金太郎氏とともに米沢上杉伯爵家を訪ね、所蔵の能面と能装束を調査された時のことが記されていたのである。野上博士は当時、国宝重要美術審査会委員をしており、かねてよりそのコレクションの優秀性を聞き、実地調査を希望していたのであったが、1942年(昭和17)8月、上杉家相談人で、東京高師教授・文学博士の保科孝一氏(米沢市出身)の仲介によって、ようやく実現したのであった。

ノートは横書き。鉛筆書きで、能面は各面に番号を付し、装束は全部で58点、能面は全部で107面(内訳は能面104面に翁面3面)を数える。この数は、翁面が一つ多いものの、前述した1929年(昭和4)当時の総計107面と一致する。したがって野上ノートは107面の全容を物語る第一級資料であり、東京国立博物館の所蔵目録ならびに図録とを照合することによって、いかなる能面が選択され、東京国立博物館彫刻室の所管となったか、所在不明となっているのはいかなる面かが判明する。

【山形新聞の報道記事】

野上博士の調査は地元でも話題を呼んだようである。それを示すのが昭和17年8月2日付けの『山形新聞』で、「鷹山公の能楽 権威野上氏が鑑賞」の見出しで次のように報道されている(読みやすさを考慮し、私に読点を補い、ルビは省略した。丸括弧の中は原注、亀甲括弧の中は西野の注である)。

鷹山公が父君重定公への厚き孝心から整えられた能楽諸一式が国粹芸術復興の脚光を浴び、米沢市出身東京高師教授文博保科孝一氏の紹介によつて斯界の権威野上豊一郎氏が来米、鑑賞研究を行ふことになったが、上杉家では三日から二日間、能面百十点、能衣装三十点、小道具一式を伯爵本邸に陳列、国宝級と称される赤鶴作の『大飛出』や『笑尉』の能面等をはじめ鷹山公が父君のためにあらゆる犠牲を払ひ求められた逸品を取そろへ鑑定を受けることになった、能面の主なるものは次の如きものである

○赤鶴作 大飛出、笑尉、小面、安達

○龍〔隆と誤植〕右衛門作 小面

○千草作 哥〔面の名称のはずだが不明。呵〔あやかし〕の誤植か〕

○氷見作 舞尉

さらに野上博士の鑑賞研究を受けて、昭和17年8月7日付けの『山形新聞』は三段抜きで「大悪尉」の写真も載せ、次のように報道している。見出しは「上杉家の

能面研究「大悪尉」に驚く野上博士」。

既報、上杉伯爵家に藩祖謙信公以来伝はる能装束、能面は本邦能楽界に於ける逸品多く、中には国宝級と伝へられる珍品もあるので、能面研究の権威文学博士野上豊一郎氏、能楽界の耆宿桜間金太郎〔豊一郎と誤植〕氏は、上杉家相談人文理科大学名誉教授米沢出身保科孝一氏と共に三日米沢市を訪れ、上杉伯邸に於て、四日は能装束、五日は能面を研究調査し同日帰郷したが、秘蔵の能面百十面、装束三十組を詳細に鑑定した結果多大の収穫を得た

能衣裳では唐織、厚板、縫箔、長絹等が代表的なもので、唐織の紅入り浅黄黒段、青海波籬、楓、桔梗、菊模様のもの、縫箔の鬱金地に芥子花と雪輪に蒲公英草のものが特に良く、半切では黒地鱗に源氏車のものは少し損傷してゐるが藩祖謙信公御着用の伝説を裏書きする逸品、大口では白地畝織の絵大口は珍品で、直垂では五七桐定紋入のものは歴代当主の舞つた時用ひられたものらしく良いもので、長絹では桜間氏も初めて見たと驚かれた朝鮮錦のものがあつた

能面では各種類殆んど網羅して居り、古面ばかりで新面は一つもなく、名匠の赤鶴作、龍右衛門作、夜叉作、福来作、徳若作と伝へられて居るものがあり、比較的新しいもので出目系統のもので、作者で珍しいものは慈雲院作(伊予の僧、足利末期)がある、女面の小面(コオモテ)男面の怪士(アヤカシ)に良いものがあり、神作、真角、鷹等も良く、作者不明の神体、福来作と伝へられる大悪尉、龍右衛門作と伝へられる小面等が代表的逸品である

野上博士は次の如く語つた

故金剛右京師が上杉謙信公が暫々敵陣に乗り込む際かぶられ公が金剛宗家に贈られたと言ふキバベシミ(天狗面)を秘蔵して居るのを見せて貰つて一度上杉家の能面を拝見したいと考へて居ましたが今回其機会を得ました、私は国宝重要美術審査会委員をして居る関係で私の口から具体的な事は発表されないが、古面のみで新面が無いのは心強く逸品が多い、大名の所蔵した能面は維新当時売払つて散逸した家が多いが、上杉家のものは全部散逸せずにある、よく見せて頂き、果して伝へられる名匠の作か否かを確めて帰ることにしたい

とある。

軍靴の音高く軍国主義一色に染められていた当時、能楽が国粹芸術として復興の脚光を浴びたとはいえ、藩祖以来の伝統芸術文化に対する山形新聞の報道姿勢は穏やかで、同時に名君の誉れ高い上杉鷹山に対する敬仰精神の深さも感じられる。

5 野上ノートの全容

次に野上ノートの関係部分を紹介する。ノートは表紙上部に「HIGHEST CLASS/SM Note-Book」と印刷された大学ノートで、大きさは縦21センチ×横15センチ。表紙に左から縦書きに「米沢上杉家能面能装束/車屋本(吉川本)/狂言面/吉川家車屋本」とペン写し、表紙見返しに「鑑賞会十一回 十月五日(月)五時半」として番組を記し、右下に斜線を引いて「上杉邸 米沢市米堀端町 福田長七郎」とのメモがある。

第1ページから、鉛筆・横書きで調査記録が記されている。鉛筆書きの上に青インクのペンで清書したり、赤インクで○印をマークし傍線を引いた部分もある。翻刻にあたっては、漢字は通行のものに従うことを原則としたが、改行や丸括弧など、なるべく原文通りとした。また改ページの箇所は『で示し、博士自身による能面や紋様のスケッチもあるので、一部写真を掲載した。すなわち、〈写真2〉から〈写真7〉までである。

能装束の調査記録については、今回は詳しく述べないが、東京国立博物館『収蔵品目録工芸(陶瓷 金工 漆工 刀剣 染色)』(1953年12月発行)の「染色(芸能装束)」の部に、能装束が330点記載されていて、年代や世紀も記し、摘要の項目には、模様・材料・仕立て・寸法などが詳しく記されているのが有益であるが、能面の場合のように「上杉家旧蔵」などの伝来を記していない。これは、1987年4月発行『東京国立博物館図版目録 能装束篇』(同館編集)も同じで、伝来の記述はない。

したがって正確には不明とせざるを得ないが、野上ノートの記録と照合したところ、野上ノートに記載された模様の記述と『収蔵品目録』の記載とがほぼ一致し、図版目録で絵柄を確認した結果、列品番号の2836番から2881番までの45点が上杉家旧蔵品であると考えられる。おそらくこれも能面と同じく1947年(昭和22)5月1日付けで収納されたものであろう。

江戸時代(17・18世紀)のものがほとんどであるが、『収蔵品目録』では、2864番のと2870番の厚板が桃山時代(16世紀)と鑑定されているように、珍しいものも少なくない(ただし『図版目録』では、2864は桃山時代・17世紀に、2870は江戸時代・18世紀に変更されている)。そこで、今回、『図版目録』での名称と列品番号を亀甲括弧に注の形で示すことにした。

【野上ノート】

昭和十七年八月三日朝八時半上野駅発 〈写真2〉

保科孝一氏同伴

茂吉郎上京中昨夜点呼予習 今夜も続行の筈

白河附近にて雷雨

福島にて奥羽線に乗り換へる(小松氏と偶然逢ふ)

アヅマ山を左に見て板屋峠を越えて米沢に五時二十分着

上杉家より福田家令等出迎へ

長岡より先着の桜間金太郎氏と三人で自動車で小野川温泉に行き扇屋に投宿
(硫黄泉) 夜十一時就寝

八月四日 朝八時自動車にて出発

能装束を見る

能面も見る 上杉神社参拝(別格官弊社) 宝物館拝観

夕方六時東家(門東町)(主水町)にて上杉家招宴 桜間氏八時過の汽車でかへる
自動車で帰る 』

八月五日

朝九時半のバスで米沢に行く こんで立ち通し

今日は能面(第三箱)と翁面三つを見, 更に午後全部を見直して等級をつける,
午後四時二十七分米沢発 』

上 杉 伯 能 装 束

十七年八月四日 桜間氏ト共ニ見ル 〈写真3〉

縫 箔(5)

甲1〇白襦子段亀甲雪輪蒲公英草花色入 〔白地花菱亀甲蒲公英雪輪草花模様
2879〕

4 花色地襦子紋尽(道成寺) 〔紺地丸紋散模様 2878〕

- 5 紫地縹子金竹垣団扇形地紙草花 ヨレヨレ [紫地竹地紙模様 2877]
 甲 2 ○鬱金地金霞ニ帆掛船芥子花(色入) [黄地芥子模様 2880]
 3 ○白綾菊縹子金総唐草木賊鎌縫草花 [白地木賊鎌草花模様 2881]

狩衣(6)

(単衣)

- 納戸地朝鮮錦 甲(珍) [紺地牡丹唐草模様 2841]
 (裕)

ワキ○紺地破亀甲火焰太鼓 甲

- 紫地桐ニ鳳凰 甲ノ下 [紫地桐鳳凰模様 2842]
 ○紺地花桐角ニ牡丹 甲 [紺地桐牡丹模様 2844]
 ○紺地飛雲ニ丸龍 乙 [紺地雲龍丸模様 2843]
 花色地花桐ニ波丸 丙 』 [縹地桐波丸模様 2845]

唐織(4) 〈写真4〉

- 3 無色草浅黄段秋草 (甲) [濃茶浅葱段秋草模様 2861]
 ○2 色入茶地金籬ニ菊 (甲) [茶地格子菊折枝模様 2862]

色入金銀段織枝垂桜御所車(新) 昭和二年修理

- ◎色入紅白浅黄黒段青海波籬紅葉桔梗(甲) [紅茶浅葱段青海波花束籬秋草
 模様 2863]

厚板唐織(8)

- 2 色入黒紅地金霞芙蓉唐草 甲 [茶地霞夕顔模様 2868]
 ♪浅黄地金市松鉄線唐草 [浅葱地石畳鉄線唐草模様 2871]
 ○1 ♪黒紅地枝垂桜鳥模様 甲 [茶地枝垂桜飛鳥模様 2867 紋様
 のスケッチあり]
 ○4 ♪紅紫段破格子花車 [紅花段花車破格子模様 2865]
 ○3 色ナシ浅黄茶萌黄段桐亀甲七宝(厚板唐織) [緑茶浅葱段亀甲七宝繫桐
 模様 2870]

色入萌黄地花紋付総亀甲菊丸(古) [濃緑茶亀甲竹雀菊丸模様2864]

色入白地茶唐草(厚板) [白地菊唐草模様 2866]

色入白モエギ段檜垣梶ノ葉 [紋様のスケッチあり]

[緑白段檜垣梶葉模様 2869]

211 (14)

厚 板(ナシ)

ナシ

長 絹(2)

○色入納戸地朝鮮錦(牡丹唐草蝶鳥)(珍) [紺地牡丹唐草蝶鳥模様 2836]

白地藤棚大紋裾霞 [白地蒲公英莖模様 2837]

大 口(9)

ワキ 白

緋 二枚(朱ノ方ヨシ)

色

茶

甲○ 絵大口(紋大口) [紋様のスケッチあり]

紫

甲○ 絵大口(紅地 流水菊)

半 切(6)

甲 黒地金鱗源氏車(古) [紫地鱗源氏車模様 2854]

外五枚(江戸時代) [紅地菱繫雲板模様 2856]

[紫地桧垣桐模様 2857]

[紅地立涌巴槌車模様 2858]

法 被(2)

紫地 二重菱 [紫地唐花菱繫模様 2859]

○浅黄地桧垣瓢箪 [紋様のスケッチあり] [浅葱地桧垣瓢箪模様 2860]

指 貫(1)

指貫ノ形ニアラズ [紫地 2853]

普通ノ間料ノ如ク仕立直シ 』

ワキ 側 次(1)

○納戸地矢車飛雲クツワクツシ

摺 箔(5)

甲○白茶萌黄段菊流水

〔紅緑白段流水扇菊竹模様 2873〕

白繻子金銀雪輪露芝

〔白地露芝模様 2874〕

白地竹ニ雀

〔白地竹雀模様 2872〕

ウロコ 二枚

〔淡浅葱地鱗模様 2875〕

〔白地鱗模様 2876〕

ワキ 直垂上下(1)

○アサギ桐模様定紋(竹ニ雀)

水 衣(5)

ワキ 茶

黒

ワキ モヨギ

縞(黒地ニ黄 モエギ)

〔紺地縞模様 2838〕 〔緑地 2839〕

角帽子(1) 』

熨斗目(2)

(ワキ)茶地(段)

〔紺白段石畳模様 2883〕

赤地(地緋繻子)

〔紅地 2882〕

以上 58点 〔以下余白〕 』

上 杉 家 能 面

十七年八月四日 五日

〈写真5〉

$$36 + 34 + 34 = 104$$

$$104 + 3 (\text{翁}) = 107 \quad \text{〔以下余白〕} \quad \text{』} \quad * \text{亀甲括弧の中は西野の注}$$

能 面

○甲

◎甲上

第三箱 34 (第三箱 二ノ抽斗)

〔能道具目録の御面箱千之部に該当〕

- 71 (福来) ○小尉
- 72 (春若) ○猩々
- 74 (春若) ○神体(目ニ金, 朱)
- 73 (龍右衛門)◎神体 ウラニ彫 一トウ ウラカンナメナシ 滑カ
? 目金スミ多シ 梨子肌ニ近シ 毛描細描 〈写真5, 8, 9〉
- 76 (龍右衛門) ○慈童
- 75 石王尉 金剛写 友水
- 77 (福来) 甲○大悪尉(ワシバナ) 〈写真10〉
- 78 (春若) 鷹
- 79 (福来) ○鼻コブ(宝生写)
- 81 宝来 甲上◎平太(極 満猶 庸久) 〈写真11〉
- 80 慈雲院 甲○皴尉(キイロッパイ)
- 82 (福来) ○重荷
- 83 福来 甲上◎小癒見 毛ガキヨシ, 赤色
- 84 三光坊 甲○大飛出
- 85 春若 ○小飛出 (彩色キレイ)
- 87 一トウ 甲○小飛出(彩色ハゲカケテキル) 淡紅
- 86 三光坊 甲○大癒見(ウラノ彫 驪) 』
- 88 宝来 甲上◎三日月 〔能道具目録では「三筒(箇の誤記)月」と表記〕
- 89 河内 ○中将
- 90 友閑 ○釣眼
- 91 是閑 ○小面
- 92 徳若 甲◎黒髭(金)
- 93 夜叉 甲◎小べしみ 極 庸久
- 94 河内 ○中喝食
- 95 春若 甲○頼政 (毛ガキヨシ)
- 97 (赤鶴) 甲○あやかし 〔能道具目録では「呵似」と表記〕
- (96) 春若 甲○中将
- 99 福来 甲○小天神 』
- 98 河内 ○三光尉
- 101 徳若 ○筋男 〔眼を中心にスケッチ, 裏の彫銘(花押)もスケッチ〕

- 100 徳若 ○筋あやかし〔能道具目録では「筋呵似」と表記〕
- 102 児玉近江 ○真角
- 103 (春若?) 弱法師 (水戸殿所持面)
- 104 (赤鶴?) 大飛出 』

第二箱 34 〔能道具目録の御面箱万之部に該当〕〈写真6〉

- 38 (赤鶴) 甲○小面 小面ニアラズ〔毛描キと書キ判(泥)のスケッチ〕
 - 37 (龍右衛門) ○小面 (ウラノ泥書 永井恒澄)
 - 40 大光坊 甲○宝来女(?) (ウラノホリ 井関大光坊作(ウラ黒ウルシ)
- 〈写真12,13〉
- 39 (古元休)満永○小面 金春写ウラノホリ六十八歳ニテ造之満永〔花押スケッチ〕』
 - 42 (大和) 、瘦女
 - 41 (河内) 、山姥
 - 43 (春若)、茗荷悪尉
 - 44 増女(金剛写)(宝来女ナラン)
 - 46 (福来) 甲○顰
 - 45 安達 (生成ノ角) 唇
 - 48 (千種) 、増髪(フカキ程度ノ年増) 髪ダケハ乱レテキル
 - 47 、中将(金春写)
 - 50 河内 甲○笑尉 ウラニ焼印
 - 49 春若 甲○あやかし〔能道具目録では「呵似」と表記〕
 - 51 (春若) 、小尉
 - 52 ◎髪無尉
 - 53 児玉近江 甲下○小べしみ(赤)
 - 54 千種 ○あやかし(キ)〔能道具目録では「呵似」と表記〕
 - 56 (春若) 増女
 - 55 近江 甲下○景清 ウラニ泥書 景清七太夫形児玉近江
 - 58 (千種) ○泥眼 (ハナノ先修繕)
 - 57 (大和) 、曲見 (毛ガキ不可)
 - 59 河内 甲○孫次郎(作ハヨケレドモ毛ガキタドタドシ)

207 (18)

- 60 (龍右衛門) ○邯鄲男
- 61 (千種) 甲○長霊べしみ
- 62 (赤鶴) 甲○獅子口
- 63 (氷見) 甲○舞尉(小型)
- 65 (龍右衛門) ○姥
- 64 (越智) 甲○べしみ悪尉
- 66 (赤鶴) 蛇(不可)
- 68 (宝来) 甲○増女(ウラノ引ツカキオモシロシ) 頬淡紅 近江女ノ如シ
- 67 (河内) 甲○釣眼
- 69 (河内) 甲○般若
- 70 洞白 甲○獅子口

第一箱 36 〔能道具目録では御面箱鶴之部と御面箱亀之部に該当〕

〈写真7〉

- 1 (小牛) ○小尉
- 2 、十六
- 6 (赤鶴) ○笑尉 ウラノ彫 一トウ(?)
- 5 大和 ○中将
- 3 (福来) ○三光尉
- 4 児玉女 ウラノ彫 石
- 7 赤鶴 甲上○山姥
- 8 二郎左衛門満照 ○俊寛 二十あまりニ似テキル
- 10 千種 甲○般若(ヒタヘ白シ 他ハウスモ、)
- (9)(福来) 、橋姫
- 12 徳若 ○深井
- 11 大和 甲下○ 頼政 ウラノ焼印 出目満矩
- 14 (徳若) 、猩々
- 13 上総介親信(河内) 、平太
- 15 是閑 甲下○小面 (金春写)
- 16 (春若) 甲下○あやかし 〔能道具目録では「呵似」と表記する〕
- 18 上総介親信 甲下○大童子

- 17 洞雲 甲下○真角 ウラ焼印
- 19 (春若) 甲下○長霊べしみ
- 20 大和 ○中喝食
- 21 河内 、顰(眉と口角ト額ニ金板ヲハル)
- 24 千種 甲下○邯鄲男
- 25 児玉長右衛門 、小町姥
- 22 (徳若) ○万媚
- 23 春若 ○童子
- 26 千種 甲○瘦男(氷見型)
- 27 (赤鶴) 甲下○野干 (ツノハ)
- 28 (河内) ○髪無尉
- 29 (大和) 、阿瘤 (平タクテ大キイ ギコチナイ)
- 30 、三光
- 31 (赤鶴) 姥 (ウラニートウ ツマラナイ面也 但シ目ノ位置高ク表ハ
オモシロイ)
- 32 (春若) ○俊寛 [スケッチあり]
- 33 石王尉
- 34 中尉 [中将か]
- 35 井関(親信) 甲下○三光尉
- 36 甲下○千種あやかし(金剛本面写)

以上 104面 104 + 3 (翁) = 107

【鑑定結果のあらまし】

野上博士は、107面について調査・鑑定の結果、翁面3面を除く能面104面、すなわち第三箱34面、第二箱34面、第一箱36面に、以下のごとく等級を付けている。

◎甲上が8面、○甲が23面、○甲下が11面、○が31面(以上773面)、無印がその他の31面である。

実に過半数が水準以上の面であり、古面(いわゆる「古作」=鎌倉末期から室町時代を中心として東山時代までの傑出した作品、いわゆる「中作」=東山時代末期から戦国時代へかけての過渡期の作家たちの作品、いわゆる「中作以後」=桃山時代から江戸時代初期までの傑出した作品)がほとんどで、新面(いわゆる「新作」=

江戸時代、ことに中期以後の作品)が皆無に近いのも特色の一つである。

たとえば、博士が「忘れられぬ傑作能面」にリストアップされた古作の龍右衛門作と伝える「神体」(博士は赤鶴作とする)をはじめ、『山形新聞』が写真を掲載した伝福来作「大悪尉」、宝来作と伝える「平太」など逸品揃いで、旧大名家所蔵の面が、多少の例外を除けば、ウツシ(模写)が圧倒的に多いとされているのに対し、上杉家のものはまさにその例外に属すると言えるのである。

また、甲上・甲・甲下・○の評価分布がほぼ「千・鶴・万・亀」の順序になっているように思われるので、四分類は等級に関連する呼び名かもしれない。なお、16番(春若)○あやかし、54番千種○あやかし、97番(赤鶴)甲○あやかし、100番福来○筋あやかし、の〈あやかし〉に『能道具目録』が「呵似」「筋似」と表記しているのも特徴で、ほかにあまり聞かないが、延宝六年の能面発注書付に「阿似」が見える。なお、狂言面が一面もないのが気になる。前記書付によれば「うそぶき 井関庄左衛門作」を購入しており、当然記載されていてよい。おそらく狂言面は別置されていたものであろう。

これらを東京国立博物館彫刻室の所蔵となった32面との比較照合の結果は次に表示するが、あらかじめ結論のみを記せば、◎甲上が5面、○甲が17面、○甲下が3面、○が6面、無印が1面、となり、かなりの逸品が選ばれていることがわかる。

6 上杉家旧蔵能面32面リスト

次に、東京国立博物館『収藏品目録』と『東京国立博物館図版目録仮面篇』に掲載されている上杉家旧蔵の能面32面を列記する。

記載順序は『収藏品目録』で上杉家旧蔵品とある番号(1459～1490)に従い、続けてそれらに相当する図録番号と野上ノートの番号を参考として記した。次に名称・作者(収藏品目録に従い「伝○○」と記す)・大きさ・面裏の銘文等・年代・世紀を記した。大きさは収藏品目録と図版目録とでは異同があり、計測時の誤差と考えられる。これも参考のため両方を記した(括弧の中が図版目録での大きさである)。なお、材質はすべて「木造彩色」なので省略した。

上杉家旧蔵能面32面リスト

東博番号	国録番号	野上	名称	作者	大きさ	面裏の銘文等	年代	世紀
1459	58	6	笑 尉	伝赤鶴作	19.6×16.3 (20.5×15.9)	一トウ〔刻銘〕	室町	15
1460	59	50	笑 尉	河内作	20.6×16 (20.6×15.7)	天下一河内〔焼印〕	江戸	17
1461	63	80	皺 尉	伝慈雲院	20.9×17.2 (20.9×17.0)	慈雲院作〔金泥書〕	江戸	17
1462	65	63	舞 尉	伝水見作	18.4×13.9 (19.2×13.4)		江戸	17
1463	69	77	大悪尉	伝福来作	21.1×17.8 (20.8×17.7)	福来作〔金泥書〕	室町	15
1464	76	64	癒見悪尉	伝越智作	20.6×15.7 (20.5×16.8)		室町	15
1465	223	86	大癒見	伝三光坊作	20.9×16.3 (21.0×15.8)	三光坊作大癒見〔金泥書〕 驢〔刻銘〕	室町	16
1466	234	19	長霊癒見	伝春若	21.2×16.3 (21.5×16.0)		江戸	17
1467	228	83	小癒見	伝福来作	20.3×16 (20.4×15.3)	福来作 小癒見〔金泥書〕	室町	15
1468	91	92	黒 髭	伝徳若作	20.9×15.1 (20.9×14.8)	徳若作 黒髭〔金泥書〕	江戸	17
1469	81	73	神 体	伝龍右衛門作	20.6×14.5 (20.9×14.2)	一トウ〔刻銘〕	室町	15
*図録では上杉家旧蔵としていないが面裏の番号からもわかる								
1470	82	74	神 体	伝春若作	19.9×14.2 (19.9×13.5)	春若作神体〔金泥書〕	江戸	17
*図録では上杉家旧蔵としていないが面裏の番号からもわかる								
1471	89	99	小天神	伝福来作	20.3×15.1 (20.9×14.6)	福来作〔金泥書〕	江戸	17
1472	150	88	三日月	伝宝来作	20.3×15.4 (20.4×15.1)	寶来作〔金泥書〕 (花押)(花押)[墨書]	江戸	17
1473	249	49	呵 似	伝春若作	20.9×14.5		江戸	17
*図録は〈かに〉と読むが〈あやかし〉で、251の写真と誤る						(19.7×14.7)		
1474	251	101	筋 似	伝徳若作	19.3×15.1	徳若作〔金泥書〕	江戸	17
*図録は〈すじに〉と読むが〈すぢあやかし〉で、249の写真と誤る						(20.8×14.3)	(花押)[刻字]	

203 (22)

1475	146	26	瘦男	伝千種作	19.9×14.8 (20.0×14.3)		江戸	17
1476	142	95	頼政	伝春若作	21.2×14.8 (21.5×14.1)		江戸	17
1477	137	32	俊寛	伝春若作	20.9×15.1 (20.9×14.6)		江戸	17
1478	136	55	景清	伝近江作	19.3×16.3 (19.3×16.3)	景清七太夫形 児玉近江 〔金泥書〕	江戸	17
1479	108	81	平太	伝宝来作	19.9×14.8 (20.1×13.6)	寶来作庸久(花押) 満猶(花押)〔金泥書〕	江戸	17
1480	117	24	邯鄲男	伝千種作	19.9×14.2 (20.3×13.4)		江戸	17
1481	97	5	中将	伝大和作	20.3×13.6 (20.2×13.1)		江戸	17
1482	129	103	弱法師	伝春若作	19.6×13.9 (20.0×14.0)	水戸殿所持ノ面〔金泥書〕	江戸	17
1483	171	38	万媚	伝赤鶴作	21.2×13.6 (21.3×13.4)	(花押)〔金泥書〕	江戸	17
*野上博士も伝えに〈小面〉とあるものの“小面ニアラズ”としている。所蔵品目録では〈小面〉とするが図版目録に〈万媚〉とあるのがよい。								
1484	159	37	小面	伝龍右衛門作	21.2×13.9 (21.2×13.6)	永井恒澄(花押)〔金泥書〕	江戸	17
1485	166	68	増女	伝宝来作	21.2×13.6 (21.3×13.2)		江戸	17
1486	172	40	宝来女	伝大光坊作	21.2×13.6 (21.2×13.3)	井関大光坊作〔刻字〕	江戸	17
1487	179	12	深井	伝徳若作	21.2×14.2 (21.2×14.2)		江戸	17
1488	211	7	山姥	伝赤鶴作	21.5×14.2 (21.3×14.1)		江戸	17
1489	246	46	顰	伝福来作	20.9×16 (21.2×15.3)		江戸	17
1490	242	62	獅子口	伝赤鶴作	22.4×17.5 (22.4×17.5)		江戸	17

7 上杉家旧蔵能面32面の特色

前述した東京国立博物館彫刻室の所蔵となった32面について、野上博士の鑑定結果を比較・照合すると以下のごとくである。括弧内の伝来は所蔵目録での名称、番号は所蔵目録の番号(台帳番号)と図版目録の番号である。

◎甲上 = 5 面

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 7 山姥(伝赤鶴作 1488・211) | 73 神体(伝龍右衛門作 1469・81) |
| 81 平太(伝宝来作 1479・108) | 83 小癪見(伝福来作 1467・228) |
| 88 三日月(伝宝来作 1472・150) | |

○甲 = 17面

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 26 瘦男(伝千種作 1475・146) | 37 小面(伝龍右衛門作 1483・159) |
| 38 万媚(伝赤鶴作 1484・171) | 40 宝来女(伝大光坊作 1486・172) |
| 46 顰 (伝福来作 1489・246) | 49 呵 (伝春若作 1473・249) |
| 50 笑尉(河内作 1460・59) | 62 獅子口(伝赤鶴作 1490・242) |
| 63 舞尉(伝氷見作 1462・65) | 64 癪見悪尉(伝越智作 1464・76) |
| 68 増 (伝宝来作 1485・166) | 77 大悪尉(伝福来作 1463・69) |
| 80 皺尉(伝慈雲院 1461・63) | 86 大癪見(伝三光坊 1465・223) |
| 92 黒髭(伝徳若作 1468・91) | 95 頼政(伝春若作 1476・142) |
| 99 小天神(伝福来作 1471・89) | |

○甲下 = 3 面

- | | |
|------------------------|----------------------|
| 19 長霊癪見(伝春若作 1466・234) | 24 邯鄲男(伝千種作1480・117) |
| 55 景清(伝兎玉近江作 1478・136) | |

○ = 6 面

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 5 中将(伝大和作 1481・97) | 6 笑尉(伝赤鶴作 1459・58) |
| 12 深井(伝徳若作 1487・179) | 32 俊寛(伝春若作 1477・137) |
| 74 神体(伝春若作 1470・82) | 101 筋呵(伝徳若作 1474・101) |

無印 = 1 面

- | |
|------------------------|
| 103 弱法師(伝春若作 1482・129) |
|------------------------|

この中には、東京国立博物館『所蔵品目録』で室町時代(15世紀)の作と鑑定された5面、すなわち、6笑尉(伝赤鶴作 1459・58), 64癒見悪尉(伝越智作 1464・76), 73神体(伝龍右衛門作 1469・81), 77大悪尉(伝福来作 1463・69), 83小癒見(伝福来作 1467・228)と、室町時代(16世紀)の作と鑑定された1面、すなわち86大癒見(伝三光坊 1465・223)とが含まれているのをはじめとして、江戸時代(17世紀)のものでも、かなり質のいい佳き面が選ばれており、総じて優秀な能面が東京国立博物館の所蔵となったことがわかる。

また、伝大光坊作「40宝来女(1486・172)」は形状は、小面ではあるが古風な趣きも感じられる女面である。裏に「井関大光坊作」と彫ってあることから、作品が伝わず幻の作家とされていた大光坊について、その真作が発見されるまでは、疑問を残しながらも大光坊の作風を考察する上での唯一の資料であった。近年、大光坊真作の「飛出」が発見され、大光坊の存在が立証されたので、上記「宝来女」が大光坊作か躊躇せざるを得ないが、少なくとも大光坊と近江井関との関わりを示す貴重な面である。これらについては、新発見の「飛出」を紹介しつつ大光坊幸賢と近江井関について考察された田邊三郎助氏「面打ち・大光坊幸賢と近江井関」(『月刊文化財』427号, 1999年4月)が詳しい。このほかにも上杉家の能面群には、能面の形成史や能面作家研究の上で、有益な作品が多いように思われる。

優れたものが多いのは能装束も同様である。前述のごとく『収蔵品目録』列品番号の2836番から2881番までの45点が上杉家旧蔵品であると考えられ、博士が調査した58点のうち過半数が収納されており、珍しいものも少なくない。

なかでも野上ノートに「(古)」とある厚板唐織は、収蔵品目録2864番の厚板「萌黄地総亀甲菊花散シ竹ニ雀五ツ紋付」で、目録では桃山時代と鑑定され、「袖筒型 約九・一糎ノ花色蜀江形紋錦ノ置口アリ 裏紅平絹 丈一三七・七糎 衿七二・二糎 袖丈五六・五糎 袖口二七糎」と記載されている。

また博士が「甲(珍)」と鑑定した「納戸地朝鮮錦」の狩衣は、収蔵品目録の2841番の狩衣で、「納戸地・黄・萌黄・茶・紅・縹金入唐草文朝鮮錦単 前丈一五三糎 背丈一七八糎 衿九九糎 袖丈七八糎」とあり、江戸時代のものである。

桜間氏が初めて見たと驚かれ、博士も「○(珍)」とした長絹は、収蔵品目録の2836番の装束で、「納戸地牡丹唐草蝶鳥模様朝鮮錦 前丈一〇九・五糎 背丈一〇二糎 袖丈七五・五糎 衿一〇六」とあり、これも江戸時代と鑑定されている。能

面に劣らず、能装束も優品が多かったようである。

それにしても、なぜ、こうした逸品・優品が米沢から戦時下の東京へ移されたのであろうか、戦争を避けて東京から地方へ疎開したというなら分かるが、その逆である。また国立博物館に収納されなかった面・装束は、どこへ消えていったのだろうか。

田邊教授のご教示によれば、東京国立博物館に残っている上杉家所蔵能面に関する記録は、A 1926年(大正15)の書類に74面が、B 年月不明のメモに103面が記されているとのことである。C 1947年5月1日付けで同館に収納された面は前述のごとく32面である。原本にあたっていないのでABの記録が何を意味するか分からないが、Bは野上ノートの能面の数に近く、おそらく野上氏が調査された1942年前後のものであろう。

さて、上杉伯爵家所蔵の能面や能装束が東京へ移送された理由として考えられるのは、当時、国宝重要美術審査会委員をしていた野上博士が重要美術品指定のために昭和17年8月調査に赴き、逸品揃いと鑑定した結果、能面・能装束のうち優品を重要美術品に指定するために、ひとまず東京の博物館へ移送させたという事情が想定できるのではないだろうか。これは野上氏が「忘れられぬ傑作能面」の中で「能の宗家の中には昔の遺風とでもいふのであらうか、容易に本面をば人に見せない習慣が今もあつて、例へば私が故観世左近氏を説いて(重要美術品指定のためであつたが)重代の本面を全部見せてもらつた時に、実はこんなことは観世家としては先例のないことで」と記していることと関連する。つまり重要美術品指定という公的使命感のため東京へ運んだのではないだろうか。上杉家旧蔵32面中、昭和17年8月の調査で博士が印を付けなかったのが、裏に金泥で「水戸殿所持ノ面」と書かれた伝春若作の「弱法師」(野上ノート103番、所蔵品目録番号1482番、図版目録番号129番)1面だけであることからの想定である。ともかく32面は昭和22年(1947)5月1日付けで博物館彫刻室の所管となった。博物館彫刻室の浅見氏のご教示によると、彫刻室の日誌に、昭和22年9月26日(金曜日)、野上博士は特別観覧のため来館されていると記録されている由である。

その他の能面も一括して移送したのかもしれないが、他は博物館へ収納未定のまま、戦後の混乱期に市中へ流れるなどして、行方不明となったのではあるまいか。能道具ではないが、上杉伯爵家に伝来していた上質中葉の斐紙に御家流の達筆で書

写された美しい『謡本』全108冊(五番綴・完曲104冊520番と、乱曲3冊、謡目録1冊。同書も能面発注書付に見える延宝ごろの書写らしい)が1952年11月に能楽研究所に入っており、残りの面や装束についても、こうした事情が想定される。

せっかく、明治維新後の混乱期にも散逸せずに伝えられて来た上杉伯爵家の能面群が一部のみ残して他は所在不明というのも残念でならない。今はただ、どこかの秘庫に健在であってほしいと祈りつつ、この拙稿を終えることにしたい。

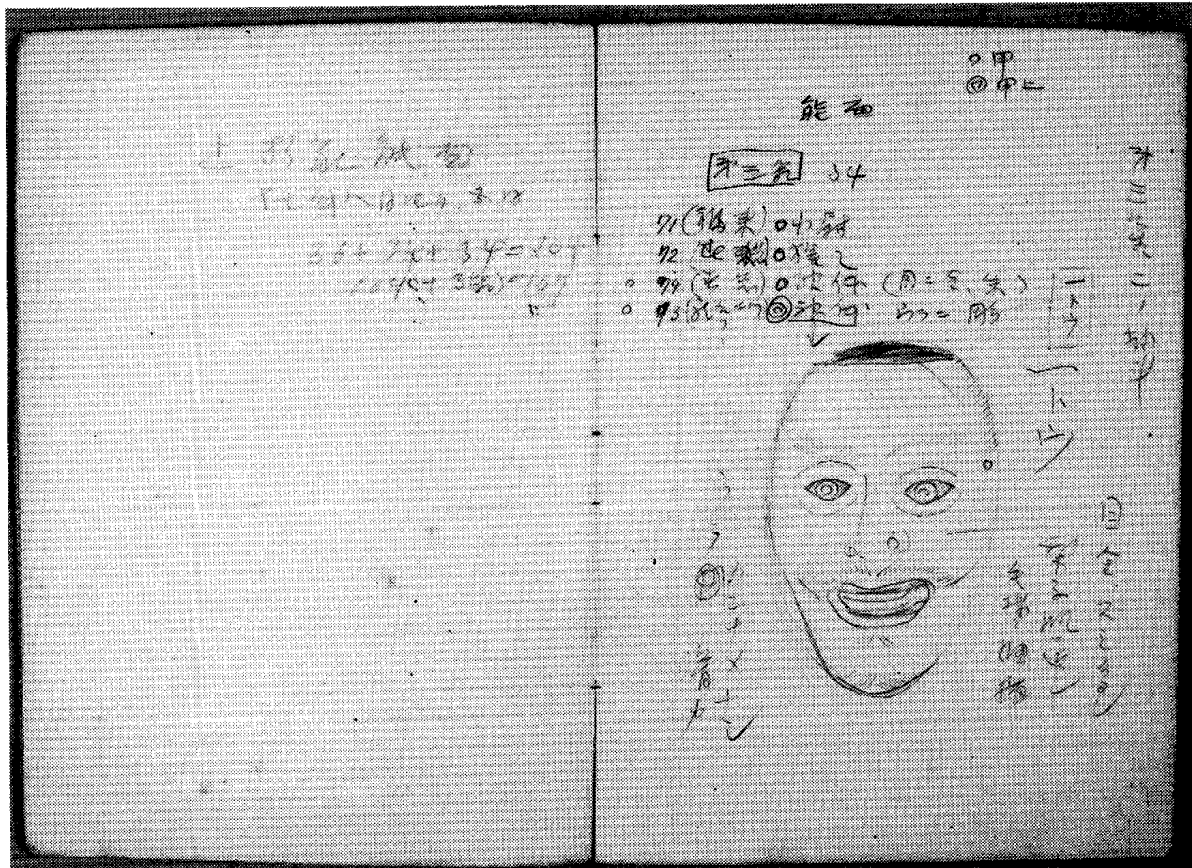
最後に、本稿を成すにあたり、野上豊一郎・弥生子ご夫妻旧蔵の図書をご寄贈くださった野上素一氏ほか野上家の人々、仲介の労を取られた岩田裕吉氏、上杉家旧蔵面の調査と写真掲載を許された東京国立博物館、お世話になった同館学芸部美術課彫刻室の岩佐光晴室長、浅見龍介研究員、御教示いただいた武蔵野美術大学教授田邊三郎助氏、『東岳院様能楽余香』を編集され、有益な資料を御教示下さった米沢金剛会の井形朝良氏、『山形新聞』の記事その他の情報を教えていただいた山形放送米沢支社の工藤達也氏、ならびに資料収集にお世話になった国立能楽堂調査養成課調査係の奥山けい子氏に対し、心から深甚の謝意を表するものである。

追記

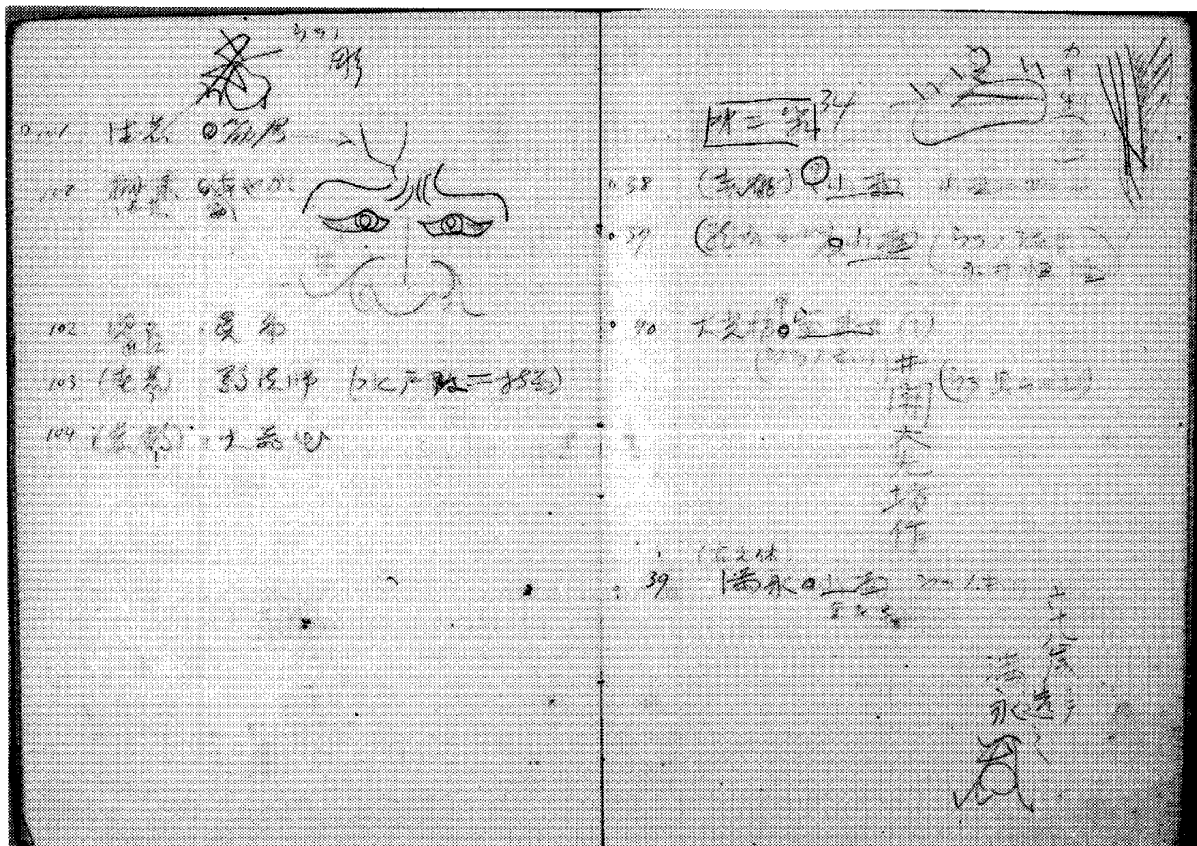
野上素一氏が2001年2月1日に91歳で逝去された。ご生前のご厚誼に対し、心から感謝申し上げるとともに、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

[illegible]

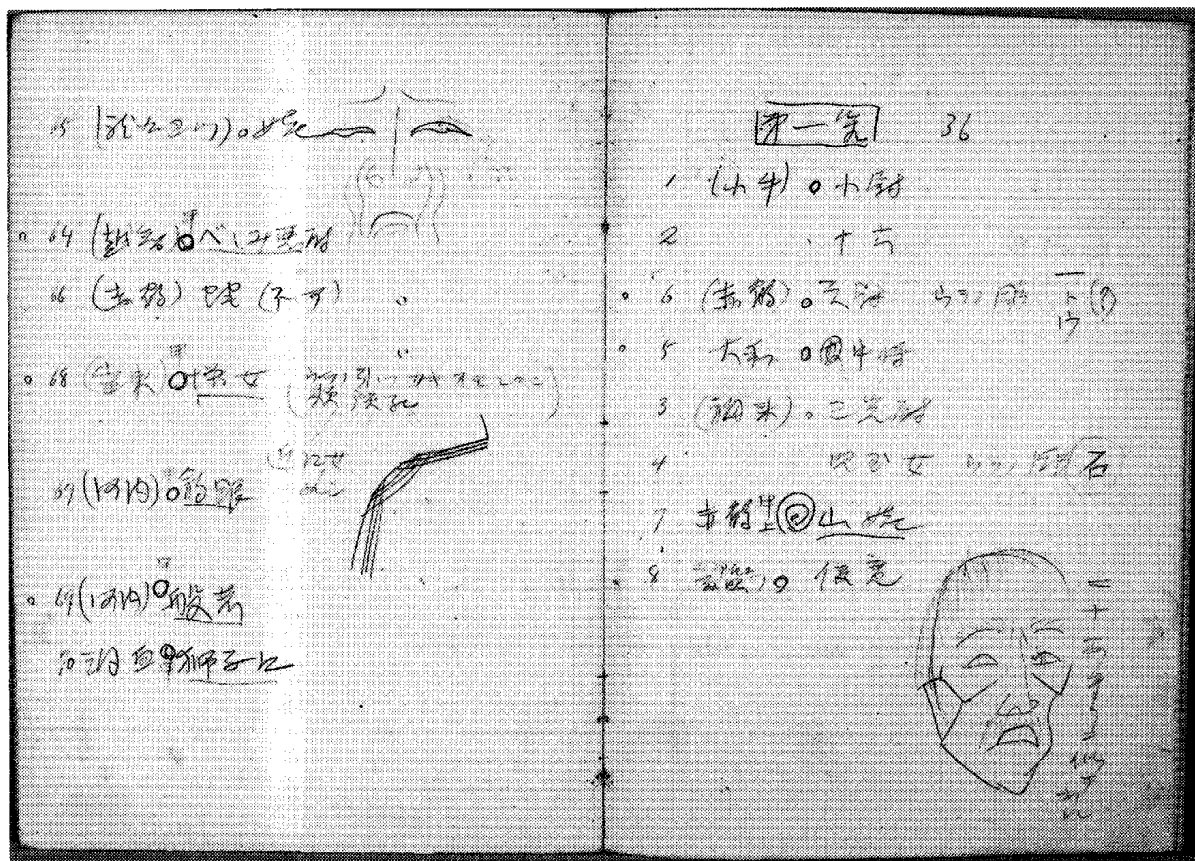
4 野上ノート 3 (上杉伯能装束 唐織以下)



5 野上ノート4 (上杉家能面 第三箱)



6 野上ノート5 (上杉家能面 第二箱)



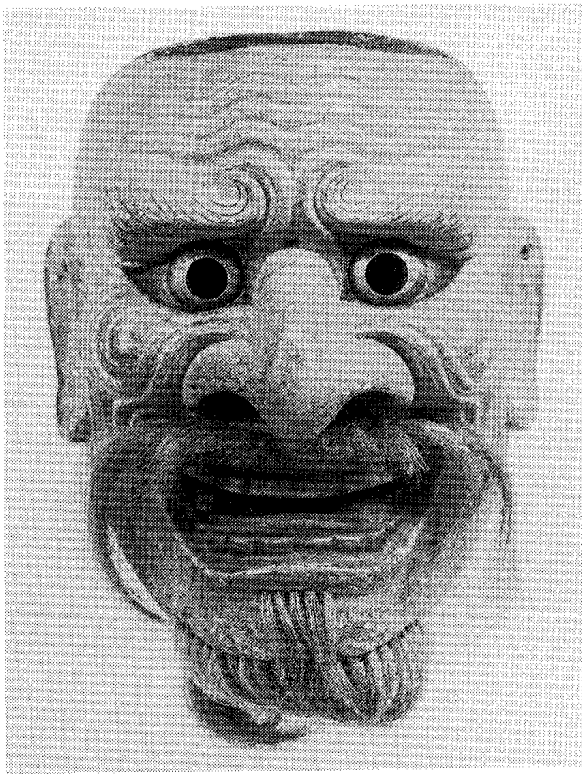
7 野上ノート6 (上杉家能面 第一箱)



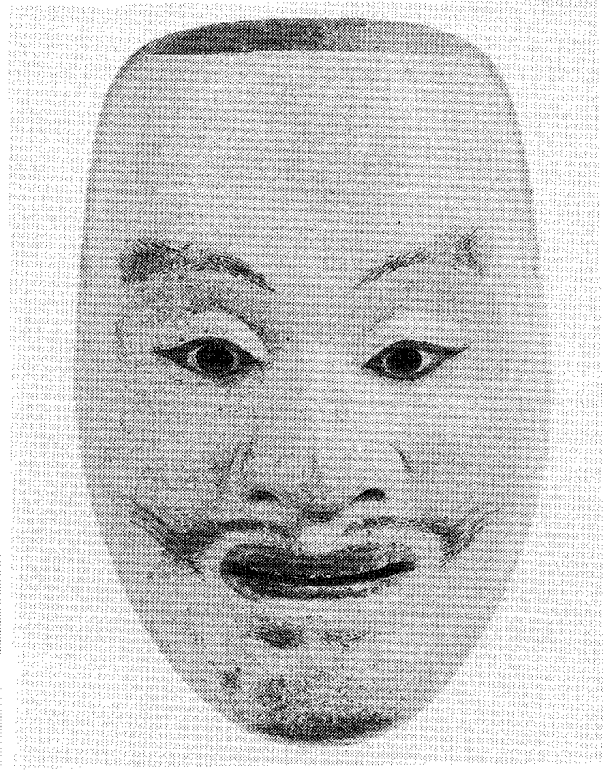
8 神体(表)



9 神体(裏)



10 大悪尉



11 平太



12 宝来女(表)



13 宝来女(裏)